

平成 26 年度 追跡評価書

研究機関 : (独)情報通信研究機構

研究開発課題 : 眼鏡の要らない3次元映像技術の研究開発
(3次元映像支援技術)

研究開発期間 : 平成 21 年度

代表研究責任者 : 榎並 和雅

■ 総合評価

(総論)

プロジェクト終了後も継続的に研究成果を挙げており、意義のある研究開発として評価できる。

(コメント)

- 多岐に渡る効果が認められ、効果的な取り組みと考える。
- コンテンツが600件以上の配布件数であったことは十分な成果と考えられる。
- 映像評価が客観的になされ、国際標準化にも寄与したことは、きわめて有意義である。
- 今後良質な3Dコンテンツを制作したり、3D技術を評価するのに必要な基盤を提供したという意味で高く評価できる。

(1) 成果から生み出された経済的・社会的な効果

(総論)

国際標準化団体への提供など、我が国の国際標準化活動でのプレゼンスを高めている。また、市場形成の支援の取り組みにより、4K3Dなど、現在も一定の知見やニーズを有しており評価できる。

(コメント)

- 3Dディスプレイのためのコンテンツを制作し、公開したことは、この分野の発展に大きく貢献したと考える。配布数も多い。
- 著作権フリーで評価実験等に使うことのできる標準画像の国際標準化団体への提供が5団体と多い。
- 2D-3D変換ソフトを提供した。

(2) 成果から生み出された科学的・技術的な効果

(総論)

人体に与える影響の評価など、人間科学的な研究の活発化を誘引しており評価できる。

(コメント)

- アカデミックな点でいえば、評価技術の開発では世界的にもトップレベルである。
- 映像評価の研究は独創的で客観的な評価がされており、この分野に大きな影響を与えた。
- 単にコンテンツを創るだけでなく、そのための装置を開発したことも評価できる。
- 3D映像の客観的評価等につながる脳活動計測装置を開発した。

(3) 波及効果

(総論)

本研究開発の成果が安全性評価研究の活発化に寄与したことは評価できる。

(コメント)

- 国際標準化団体への貢献も活発になされており、その後の研究で寄与文書も提供しており、評価できる。
- 国際標準化機関に標準画像を提供し高く評価されている。

(4) その他研究開発終了後も実施すべき事項等

(総論)

アカデミックな分野だけでなく、多くの展示会などでコンテンツが継続的に使用されるなど、普及活動がなされており、当初の目標を達成していることが評価できる。

(コメント)

- コンテンツが200インチ3Dディスプレイのコンテンツとして利用されたり、超臨場感コミュニケーション産学官フォーラム（URCF）の評価WGで活用されていることは、評価できる。
- 学会発表も件数はあまり多くないが継続している点が評価できる。

(5) 政策へのフィードバック

(総論)

映像評価の国際標準化は、個々の研究機関や企業だけに任せず、国としての支援が重要と考える。

(コメント)

- 3Dの新たな市場形成への支援という点では、国家プロジェクトならではの取り組みと考えられる。
- 標準化機関への貢献が評価できる。
- 今後60fpsへの対策を進めるべき。